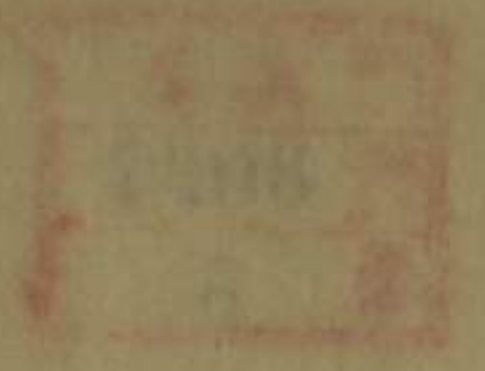


KODAK Color Control Patches  
© The Tiffen Company, 2000  
LICENSED PRODUCT



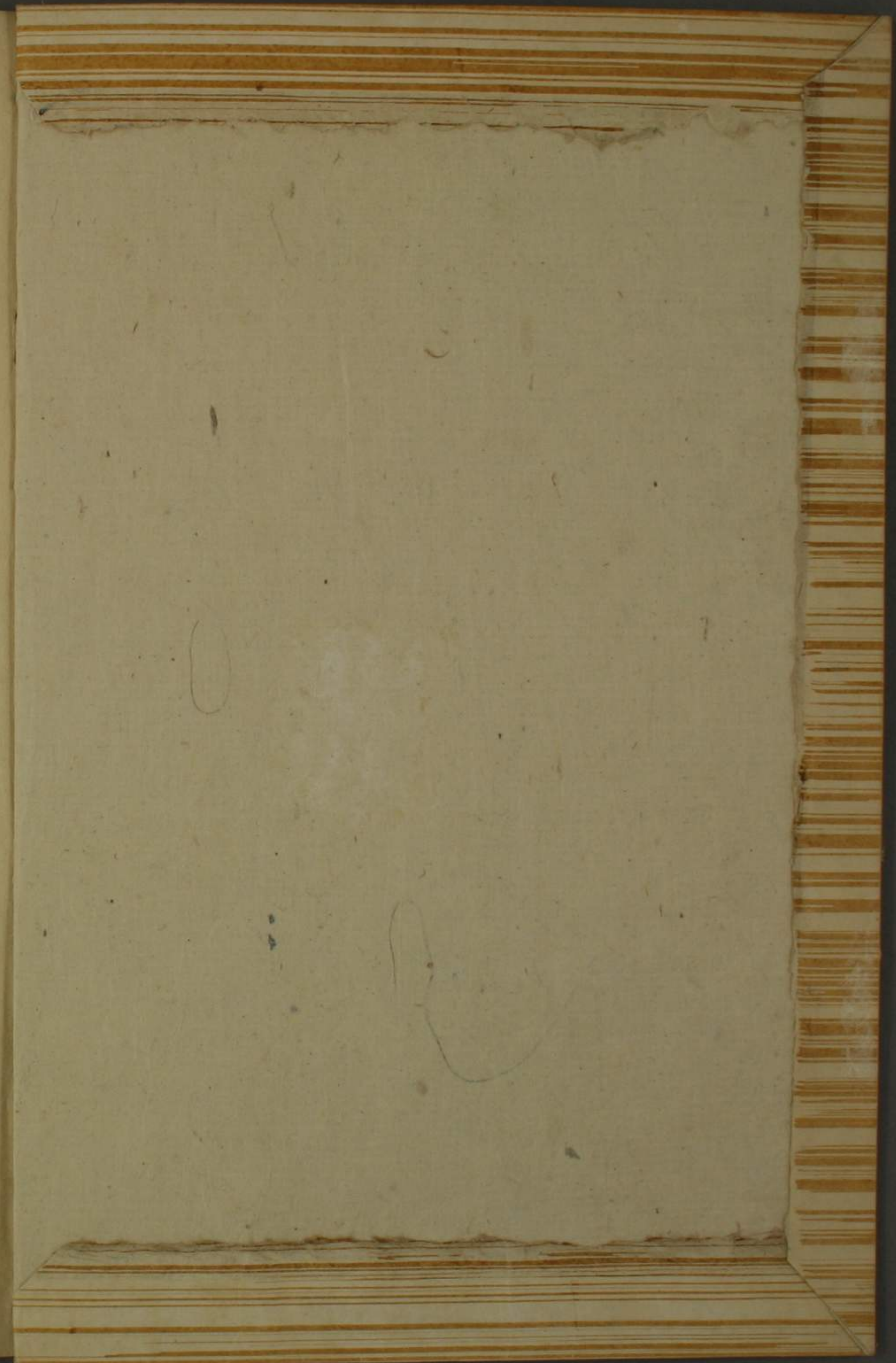
ル 2  
3097  
8





日本行紀  
第十九篇

淡路島... 淡路島の風景... 淡路島の歴史... 淡路島の文化... 淡路島の産業... 淡路島の交通... 淡路島の教育... 淡路島の医療... 淡路島の宗教... 淡路島の芸術... 淡路島のスポーツ... 淡路島の観光... 淡路島の気候... 淡路島の人口... 淡路島の面積... 淡路島のGDP... 淡路島の失業率... 淡路島の犯罪率... 淡路島の平均寿命... 淡路島の出生率... 淡路島の死亡率... 淡路島の人口密度... 淡路島の人口構成... 淡路島の人口推移... 淡路島の人口予測... 淡路島の人口問題... 淡路島の人口政策... 淡路島の人口戦略... 淡路島の人口計画... 淡路島の人口管理... 淡路島の人口開発... 淡路島の人口投資... 淡路島の人口吸引... 淡路島の人口流出... 淡路島の人口流入... 淡路島の人口移動... 淡路島の人口分布... 淡路島の人口集中度... 淡路島の人口分散度... 淡路島の人口集中度... 淡路島の人口分散度... 淡路島の人口集中度... 淡路島の人口分散度...



門 凡 2  
院 3097  
卷 8



日本行紀

第十九篇

阿媽港滯留紀事

其二 某日朝舟中... 惡夢遂了... 搜索の復... 長尾の所置の復... 遊獵に大獲を得... 日本が発程すべし準備を... 小隊船の編制及び贈物の略記

早稲田 大塚 管轄  
26.2.5  
森

看宦試<sup>ミルヒト</sup>予<sup>予</sup>一々甚奇異なる夢<sup>夢</sup>を得たり  
ノ終<sup>終</sup>予<sup>予</sup>が時<sup>時</sup>儀<sup>儀</sup>の碎破<sup>碎破</sup>を<sup>を</sup>予<sup>予</sup>に握<sup>握</sup>まると覺<sup>覺</sup>  
えと<sup>と</sup>めたり<sup>たり</sup>な○夜<sup>夜</sup>ハ九<sup>九</sup>時<sup>時</sup>四<sup>四</sup>時<sup>時</sup>我<sup>我</sup>が曉<sup>曉</sup>の頃<sup>頃</sup>な  
る<sup>る</sup>一<sup>一</sup>但<sup>但</sup>此<sup>此</sup>日<sup>日</sup>ハ再<sup>再</sup>遊<sup>遊</sup>獵<sup>獵</sup>ハ出<sup>出</sup>づ<sup>づ</sup>一<sup>一</sup>こ思<sup>思</sup>ひ<sup>ひ</sup>ち<sup>ち</sup>れ  
ば直<sup>直</sup>ハ寢<sup>寢</sup>辱<sup>辱</sup>よ<sup>よ</sup>記<sup>記</sup>き出<sup>出</sup>きた<sup>た</sup>斯<sup>斯</sup>く予<sup>予</sup>が文<sup>文</sup>庫<sup>庫</sup>を  
ひらき見<sup>見</sup>らる<sup>る</sup>予<sup>予</sup>が怖<sup>怖</sup>む<sup>む</sup>一<sup>一</sup>予<sup>予</sup>が時<sup>時</sup>儀<sup>儀</sup>及<sup>及</sup>ひ<sup>ひ</sup>メエス  
ラル<sup>ラル</sup>稱<sup>稱</sup>ウ<sup>ウ</sup>某<sup>某</sup>の時<sup>時</sup>儀<sup>儀</sup>共<sup>共</sup>予<sup>予</sup>右<sup>右</sup>に<sup>に</sup>似<sup>似</sup>ル<sup>ル</sup>某<sup>某</sup>ハ予<sup>予</sup>が同<sup>同</sup>寢<sup>寢</sup>  
の人<sup>の人</sup>ハ一<sup>一</sup>此<sup>此</sup>日<sup>日</sup>を<sup>を</sup>予<sup>予</sup>と<sup>と</sup>共<sup>共</sup>に出<sup>出</sup>獵<sup>獵</sup>を<sup>を</sup>予<sup>予</sup>と<sup>と</sup>約<sup>約</sup>せ  
し者<sup>者</sup>なり

此一事ハ予等の爲<sup>爲</sup>ハ不快<sup>不快</sup>なる事<sup>事</sup>なり其<sup>其</sup>故<sup>故</sup>ハ  
二個<sup>二個</sup>の時<sup>時</sup>儀<sup>儀</sup>共<sup>共</sup>予<sup>予</sup>ヨロメエテ<sup>テ</sup>ル<sup>ル</sup>測<sup>測</sup>量<sup>量</sup>特<sup>特</sup>儀<sup>儀</sup>の用<sup>用</sup>ハ  
して<sup>して</sup>予<sup>予</sup>の<sup>の</sup>時<sup>時</sup>儀<sup>儀</sup>ハ予<sup>予</sup>が子<sup>子</sup>ウヨル<sup>ル</sup>府<sup>府</sup>を<sup>を</sup>覺<sup>覺</sup>せし<sup>し</sup>前<sup>前</sup>  
残<sup>残</sup>ハ此<sup>此</sup>回<sup>回</sup>の<sup>の</sup>旅<sup>旅</sup>行<sup>行</sup>ハ用<sup>用</sup>ハん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>爲<sup>爲</sup>ハ一<sup>一</sup>百<sup>百</sup>ドル<sup>ドル</sup>ラ<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>  
銀<sup>銀</sup>貨<sup>貨</sup>ヨテ<sup>テ</sup>購<sup>購</sup>取<sup>取</sup>を<sup>を</sup>所<sup>所</sup>ナリ<sup>リ</sup>故<sup>故</sup>ハ此<sup>此</sup>損<sup>損</sup>失<sup>失</sup>ハ未<sup>未</sup>容<sup>容</sup>易<sup>易</sup>  
ニ償<sup>償</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>得<sup>得</sup>ざる<sup>る</sup>所<sup>所</sup>ナリ<sup>リ</sup>是<sup>是</sup>ヨリ<sup>リ</sup>尚<sup>尚</sup>他<sup>他</sup>處<sup>處</sup>と<sup>と</sup>  
搜索<sup>搜索</sup>せし<sup>し</sup>頃<sup>頃</sup>更<sup>更</sup>ニ<sup>ニ</sup>二<sup>二</sup>件<sup>件</sup>の<sup>の</sup>遺<sup>遺</sup>失<sup>失</sup>せる<sup>る</sup>物<sup>物</sup>あり<sup>き</sup>蓋<sup>蓋</sup>  
草<sup>草</sup>竊<sup>竊</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>爲<sup>爲</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>事<sup>事</sup>明<sup>明</sup>か<sup>か</sup>なり<sup>リ</sup>○予<sup>予</sup>等<sup>等</sup>が住<sup>住</sup>ミ<sup>ミ</sup>ける<sup>る</sup>  
病院<sup>病院</sup>ノ<sup>ノ</sup>役<sup>役</sup>使<sup>使</sup>せる<sup>る</sup>支<sup>支</sup>那<sup>那</sup>ノ<sup>ノ</sup>丁<sup>丁</sup>卒<sup>卒</sup>二<sup>二</sup>名<sup>名</sup>樓<sup>樓</sup>上<sup>上</sup>ヨリ<sup>リ</sup>察<sup>察</sup>せ  
垂<sup>垂</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>街<sup>街</sup>頭<sup>頭</sup>ノ<sup>ノ</sup>下<sup>下</sup>リ<sup>リ</sup>逃<sup>逃</sup>ま<sup>ま</sup>去<sup>去</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>リ</sup>○此<sup>此</sup>事<sup>事</sup>ハ<sup>ハ</sup>同<sup>同</sup>リ<sup>リ</sup>て

遊獵を廢し直上は其の國の領事官より申稟し  
要須なる勾當と行むと云ふに依りける。○蓋し此  
地より聞けり所は据まじ事照明を得べき也吾  
亦知るべからば○凡追捕の官司を行ふは何ま  
の地より在りても厭惡すべき一事なり殊に此地  
の如きは官司の名は存するも其実は無きと同  
き小放てとや  
予は心と慰せしは予其盜賊と捕ふるときは其  
賊直に罰と蒙るべく及び予若彼此の家を探索  
せむと云ふ好むときは其を爲す兵卒を借る大

と云得べきの事件なり○爰は教育中制度より  
て恐懼を受けざる爲に人の事より醜惡なる  
音信あり○然もども予己心より得て予  
が自己の制度を建つべき景勢中にあると既に  
よ久し而して予直に此場を捨てて亦に自予が  
身を助け救ふべきを決定せり  
予が第一に爲せしは若し盜棄せられし物品或は  
其盜賊を覺せし者あるときは之に許す多量に賞  
物と云ふべき約束あり○夫れ巨大なる賞物と許  
せし者大抵自ら多く勤勤を爲すと云ふ好まざるを

都て世人の察する所なり而して予が此處置ふ  
故とも亦此の如し然もとも予ハ此特務めて多  
くの細作と出たり○予此日を終日諸種の檢査  
と為して其賊何の處に隱せしむべと察覺を心  
大に務めたり然もども「井ルリヤムス」君とし  
て全く其事に關らしめし○其夜亦至りて予水  
手二人と兵士兵器を携へ成中卒より四人の背  
兵と誘ひ而して後澳門にある支那の陣屋を探  
索せしむと開始たり  
予が至りし場所ハ自然に賊徒の巢窟となるべ

き尋常の種類にして即茶店鴉片店娼寮酒店及  
び其他此の如き万民の集るべき家屋なり但是  
等の家屋ハ假令人と支配せんと欲する者ハ留意  
すべき事件多しと雖も此の如き機會を得る事  
非ざるを予決して之を見らむと能はざるべし  
○爰に予が兵卒甚適宜に挙動せし事を記する  
を要とす○一瞬の間は兵卒其家屋の通路を悉  
く警衛せり而して之に劣らば速に長水夫及び  
予の長屋の諸隅を探索せり○既而上に記せし  
が如く予此夜中れ巡行し由て尊貴なる支那人

カ活計を精細に知るが爲に許多れ機会を得たり  
○娼寮にてハ大抵茶及び他の爽神の料を得べし  
又鴉片を用ふる者多し其室内にハ藪席を覆  
びたる過大に臥床と備へり○予其室の遊客を  
見ると或ハ鹿物珍味に諸品を混しとる晚食を  
設けて茶或ハサムコウサムコウ酪酪酌酌す下下き飲料と  
飲む者あり或ハ又所謂藪席上に臥して鴉片を用  
ふる者あり○鴉片を用ふる者此爲に短き燈心の  
燭を小盤に上に設け多し○鴉片管は長ハ十八寸  
或ハ二十寸小して其頭ハ煙管に頭より

尚少なり○之が爲に制しとる少量の鴉片殆下濃舍利  
如別如別の大允麥粒に吞と爲し針を以て大さハ管頭  
に致す而して後之を用ふる者藪席上に臥して  
がら管頭を燭に接して二回或ハ三回之を吸  
い尽せり○或ハ其量を尙減し用ふまじも猶我  
輩甚多量の巻煙草を用ひ多しが如く感ぜる者  
あり然まじも又大さハ連用し全く昏睡して一  
二少時の間麻痺せしが如く平臥せざる者あり又  
コテコテルル強名と發して鼻響より生ぜる異音の歌  
と助くる小女上圍繞せらまて其内ハ鴉片を用

いし他の客あり○予が之に熟せざる事上吟て  
ハ此樂第三月啓の願の榴樂の類すは者多し然  
まども鴉片を用いて半醉せる者其車にハ其音  
声愉快よして愛玩すべきなるべし  
又此類の内にて最行儀正しきともいふべき他  
れ一象にハ養服を着せし男子十人或ハ十二人  
及同敷或ハ尚多く婦人相集りて撰好は晩食を  
設けしる卓子を圍繞せり○シテハ樂器名和せ  
し尋常は歌れ外に又金屬は三弦と施せるハ  
ハハ樂器名種類一個笛一管カス久子下ハ樂器名

と携へしる少年一人及び二個の小バウと嫩き  
樂器と同時に搦せし娼妓一人より全成せる一  
個の歌舞と奏せり○男子ハ都て上は記せるが  
たよく美服を着せり而して予が意は留まらざ  
其女子皆可なりふして嫌ふべき形容なきと  
なり都て此ハ一個の礼節あるが如くして殊  
子は是等此場處よてハ驚くハ勝へしり  
不幸にして予が探索ハ都て全無益となりしり  
○然も此種の家屋二個を残せり而して  
此家屋をも亦探索せし後其夜尚明けざるを以



て港内の支那船を探索せり○我輩其諸人を見  
る小皆熟睡せり其舟に其船海賊小襲ハと  
とハ察して驚き醒めし者あり○然まどと諸  
人都て總ふ人と隠れんとを得べき場所を窺く  
我輩れ為小聞きしり○此小於て予甚<sup>タ</sup>殿寄して  
家ニ歸り

翌朝一個の細作予に探索せり兩人を見し大と  
と告げ且其人物と大もハ發覺せる場所との簡  
短なる書記と與へしり○暫時熟考せし後予一  
個の計策を案ト出せり其計策れ良なりし大と

下よ於て漸次之明白するべし○其秘計を尙好  
く秘するが為先小具報告小注意せざるが如き  
取容と為し其日ハ昼夜の間尚検査を為し及び  
評多れ無益なる労働をなせし大とハ罵り始め  
し兵卒の嘲弄ハ度外小置サリ  
澳門を既小上小記せるが如く一個の出嶋とし  
て先に記し多る門口の白側小葡萄牙の領地終  
る其出嶋の陸邊小幅漸く一里許の入海あり○  
其對岸小二の澳村及び種々此神社あり○此  
の神社の一個の内は盜賊隱る任あり○予其地

理を詳し領會して翌朝三時より兩人の水夫と寤  
醒とし免是より予が計策を簡短に告げたる而し  
て其兩人ハ予に加勢を以て直ちに準備せ  
り○予各人に手銃一個と強轉馬銃一個とと與  
へ予も亦同兵器を取りて櫓を為すを以て出  
が如く大と引き並に要領の時に臨みて通辨官  
と申し用ふるが為し其土地ハ奴僕一人を誘ひ  
而して後旅客を渡らしむるか為し昼夜準備せ  
るに小舟に乗りとり  
我輩志す所の地より上一二百歩を距りしる堤

に至りしハ正に拂曉の頃なり○予務めて速に  
各人より其立場を示教せり而して諸般の所置既  
に整ひ及び其場所を圍むる頃ハ其神社の出  
路と悉く警固すべき信節を為しあり○既に警固  
と為し終て直に其右屋内に進りり○兩人の  
賤賊同種の貧賤なる少年十人或十二人と共  
屋内より顕て来りり○賤徒預計りて其土地の  
奴僕の警固せし戸口より不意に逃去らむと  
とハ務めり而して其奴僕ハ之を拒むる力微  
弱なりしが為し遂に這ふ投げ出さむとあり

此は於て此賊賊屋外より出て諸方より向ふて便宜  
の逃路を得んと欲すといふと河を求めたり然もども我輩ハ  
好く其少年と看守し一人の水夫其一人を追ふ  
て遂に其長尾細を把るを以て得たり○賊  
徒返り来りて之より逃れせり但其賊ハ一樹木の  
如き少年なるが故に水夫両手の刀を極めて之  
と支住せり然もども「あつくり」欲勇猛の威を  
顯し汝神に對して此犬の子よ此をばき罪を犯  
せり予今汝をお伏せむと欲すと烈く呼ば其手  
銃の柄を削髪せる腦額上より下るべく歩ち下す

以て其賊地上より倒るゝと矢を斧前の牛に打たせし  
此間より予も亦一賊を捕へて他は水夫も亦一  
賊の尾を把り然もども其手と烈く引きしと  
き不幸にして水夫は強く仰き倒れ其賊は逃れ  
去りしなり○是を以て其賊の假装の尾を着けし  
と正し明白なる○此故に支那の盗賊ハ特宜  
し由て其尾を除くを以て刑罪の法とすへき  
を知らずと必要を以て此場より於ても亦此  
言は符合せり

予が捕へし所れ人の屢病院に走る者なり○  
我輩因虜を縛して其手を背に致し之を小船に  
送り○其両囚甚驚怖して且性善に復せり其  
故に予其後聞けるが如く支那にては赦回此盜  
賊を死刑に處するを以てなり  
我輩兩囚を好て小舟中に護り且陸地を離る  
大と些少にして之を探索するが爲の準備と爲  
しり而して其時速に一賊の袴中に縫ひ入る  
とる井ルリアムス君は時儀を見出しり其言  
より後ハ予が時儀ハ其食料の代物と見出しり

○其河を距る大と少許にして渙村此側あり  
象と其賊予は告るが故に我輩直に其處に行き  
其目的とせし人れ倒れ至りて我輩に属せる夥  
多れ汗襦ジツ莫大に及び他の物品を見り然るを  
も予が時儀を見出○此故に我輩其盗物を辨不  
る賊と並に盜賊を捕へり而して茅八時よ  
ハ既し病院に歸ると以て諸人大に驚きり其  
故に予が素志を絶へし人上告げざるなり  
予其因虜を好く関鑰中に置けり而して此時始  
て支那に行はる盜賊の交状及び其後黨中よ

危難あるときハ相互よ之を救ふと必要なる  
等此事件を知るふとを得しり○予が捕へし盗  
物を貯ふる賊ハ其村に於て良民と為らばし男  
より○我輩の帰着後須更よして好服を着せる  
他の二人来りて此男の保人ウツミたるふと願へて  
然もども予之を許さざりしよ至りて若予が特  
儀を返し與ふるときハ予も亦其男を縦ち返次  
ふも願へり○予之を諾し午後よ至りて既よ  
予が特儀を損傷なくして入手せり  
此事件と澳門よてハ甚感服し予が此機會よ就

て顯せし勇氣と遇録せり○然もども支那人も  
非常の欺詐多く及い姦悪なるふと及い着大に  
る危難なくして他邦人を亦ち殺すふと可得る  
ときハ之を一個の大切とするハ実事なり然る  
よ又真性質は冷淡なる所あるが故小剛勇なる  
行状を以て之を威伏せしむると亦難しとする  
所に非ず○今我輩僅ふ三人よして人と其住家  
より引出し且夥多の支那任民中よて之を因虜  
として誘ふふとを得しハ多ぶ此性質あるがふ  
免なり

葡萄牙の官吏ハ其自己の制度を擴張し得ざりし  
しハとを甚心配せり○余自察するハ予ハ此處  
置小由て他邦に人民ハ一個の大功を顯し  
其故ハ予既ニ記せるカ如ク支那人として尊敬  
せしむるガ為ヨハ勇氣と果斷とハ勝る者あら  
ざまハなり

第十二月の末小枝輩都て又「リスケハンナ」船ハ  
乘リ且再度日本に航するガ為に諸人大ニ勉強  
せり○「レキシント」船歳首の頃ニ来着せし  
小由て枝輩ハ隊船全救ふ満るとする事と得

しり此隊船と為せし水蒸「フレガツト」次の如し

「リスケハンナ」船 (旗船) 大砲九門

「ボウハタ」船 同 大砲九門

「ヨッシ」船 同 大砲十門

「マセトニア」船 同 大砲十門

都て二十「ト」より二千五百「ト」までの水蒸

船にして六十八号より百二十号の「パイキ」

「ス」砲を装せり

之小加ふるハ尚「スロ」船種

「軍快船」あり

サラトガ 二十二介れ大砲二十二門  
 フリモウト 同 二十四門  
 バンタリア 同 二十二門  
 又別に左の運送船あり  
 シツプリ 二十二介の大砲六門  
 コウタムプトン 同 同  
 コキシングトン 同 同  
 總計十艘にしてハイキサンス砲五十二門を加  
 へ算して大砲百三十門と装し及び二千六百人  
 を乗らしめしり

加之預備豫とするが為に指揮官リングゴルト  
 人の隊船と為しとる五船は来着を日々希望を  
 リ隊船上甚多忙にして殆<sub>下</sub>絶へて一個の安静な  
 る場所とも見るに難し○食料並小農業の器械  
 及び逸樂の具等の驚くべき夥多の装置を納め  
 たる許多れ箱を船に運輸せり但此諸物ハ予が  
 將に復行かむと欲せし日本に帝に贈が為なり  
 ○此品共小運輸せし轍道の為の全具を皆其  
 箱を鮮き點檢して其無難なるを以て徴せり○  
 此具ハ炭水車を屬しとる小くして最美麗の水

蒸<sup>モキ</sup>装置車と五十人と乗らしむべき盛小飾りと  
る車と<sup>モキ</sup>都て尋常に勝きて製造せし者なり而  
して救里の距離に用ゆべき鐵<sup>テツ</sup>邊活字版の壓具  
抄麥及び刈草の装置織倚紡績の装置加之運輸  
にべき麵包爐等の諸品船の諸隅に充滿せり○  
若我輩此珍貴をべき諸般の器具と排列をる六  
とを要せしときハ実小精巧と窮りし物品を集  
めとる一個の殆<sup>ト</sup>美麗なる觀場とまるべし

日本行紀

第二十篇

琉求より第三の上陸  
香港の發行  
海底の火山  
那霸江の來着  
故郷と憶ふ情  
來住せしめと本國人の眷族  
石炭礦を求むるか爲に小行步  
不幸



琉求歳首の祭式

國民の大なる信意

船の變換

日本海より一千八百五十四年二月十日水  
蒸フレカット「ホウツタン」に記す

我輩香港を去りしハ第一月十三日より全數  
此軍用快船より成りし第一分隊の我輩は先  
こちて琉求に發せし後第三日なり我輩の法度  
正しき三艘の水蒸フレカット次第と追ふて破

と挙げ及び各船皆一艘の運送船と牽索と接して  
港を發せし時他邦軍艦の諸人舷に立ちて敬意  
を表し及び「アトミテール」艦「ヘルレウ」の旗船  
「アンセステル」艦の「カノン」砲我輩の爲に祝祭と  
爲せしハ實に一個の美觀なり○香港はありし  
我輩の朋友多くハ「ホカト」船種小乗り帽及び包  
袱を揮ふて別を爲せり加之諸船小食料と運ハ  
或ハ往來船となりし支那の「ボカト」も亦鼓及び  
ゴング「樂器」を搦し「送禮」飲及び他の烟火を點し  
て我輩の恙なき旅行を祝する爲に大なる「イン

ヨス支那と臥て語なりの祝と為をり

十五日ホルモの南岬と廻る二所よ小さき火

山と見るソウタン船ト船輜重船此度ホルモ

サ近き海底火山あると見る烟雲海より登り

四天清朗なるに海水怒狂ふ此船よ總時後行き

けるマセドニア船の甲板組索ハ數時間自き灰

以て覆へりき

二十日近き海路恙なく再い琉求の那霸港よ船

泊りより此日妙手の工師悉く上陸す細比支再

い海と擇ふの日よて爰に留居人為なり

此度コムモドレ彼理琉求主よりあける精舎

并よ是よ附る家屋園池と金と出して之を借り

舟人の病院及い居所とセリ小美き此精舎恒よ

此島人他邦の人と接る度毎に其場と為るり此

因て爰よ記すへき事あり即ち十八百十七年よ甲

比丹マキスエルル各其後アドミラール各セシ

ル各及い千八百四十九年よ米利堅の小船アレ

ブレ皆其輜重と此所よ乾し佛蘭西の使節ア

ト子ス各一時此よ住心遂ふ此よ死し前年吾儕

電信機寫真鏡具外諸物ハ此よ藏き其後病院と

と成る此猪舎に近接る海濱は吾輩炭庫と鎮  
此より少し隔ちたる松林中に吾儕の北<sup>カ</sup>域<sup>イ</sup>あり  
嗚呼此内は吾黨の淑人永久は瞑目て起さる人  
幾人なるらん既殆頽敗とる此墓中の三ッ者甲比  
丹「マキスエルル」以来の事なり船將「セシル」ハ其  
三禪長ニの水手と此より留り「ブレブレ」ハ其永居  
と一ッの墓を以て標し吾船隊も七個の親墓を以  
て其救<sup>ク</sup>増す

午後より上陸し何くも私事を營み日暮より歩み  
て那鼻へ至り整師「ベ」テ「ル」ハ「メ」ルと訪ふ

其門内より入り頃ハ既物色も辨さりき然れども  
犬ハ我を知て尾を揺て我より飛懸まりさて視ま  
ハ其居室の戸の開きたる前より至り室中に圓  
卓子を居き燭火を點し家眷悉く之を環坐を<sup>ル</sup>  
シ<sup>ル</sup>谷といひけり幼き小児の高声<sup>ル</sup>て昏禱の文  
を誦るを聴居り時より頗る驚しなハ此優愛<sup>ヤ</sup>き游  
と訪ふ人事を思ひて足声と謹し三両手と疊<sup>ミ</sup>  
静<sup>ミ</sup>内の人と共に拜し禱祝全く終るまで暗<sup>ル</sup>  
立此時は多般の感情溢き起り遂に我身のかく  
故郷を離れし事と思ひ出して心ハいと淋<sup>シ</sup>志

く父母兄弟姉妹親友ハ強索を以て心と束縛す  
也父母兄弟等ハ概カク既往ノ属す吾人親兄ノ膝下  
小養ハまで至幸なる時にすら尚恒小親兄心中  
に空虚なる地と置此空地ハ唯自己の家眷自家  
の火所ノミ之盈フヘシ嗚呼人心性靈ハ驚クヘ  
キ其情思ノ極メテ止ヘカラス極メテ痛切成中  
至高峻徳小達スヘキ因を兼藏心トシ衆人此説  
と知悉す者あらハ兩間ヲナカニ多福の人多からん  
余ハ戸内に入り衆人ノ其多福康健を祝く其答  
辞頗シ懇篤なり衆兎雀躍前後左右より我手執り

我カキタシ御齋を執る一人も余を忘まらざる兎ウサギとし互に  
談話事多く遂に更深コソ及り  
此夜ハ爰に宿りてよと勸しかと聊運動すヘシ  
と思いて家に帰る善念禱ふ代へ此日を拜むこ  
と銘肝す  
二十一日より二十八日まで八日の間暇を得て  
随意に私事と管心事を得たり乃半ハ精密に二  
三山の佳景と写し土地の圖と畫き半ハ既スガせり  
為つへき事ハ事繁くてお棄とりけることを補  
いけり

コモムドレ上陸の間アングラ船の次將を  
ングル琉求全嶋の海濱を精測り吾儕到岸の後  
八日に歸來る其報知の声誉甚佳し就中稍扛の  
方に多くの好港ある事と其近地小石炭の蹤跡  
と檢出する等最較著き者なりコモムドレ直下  
禪長三人小命して再往て更に檢査せしむ此中  
に「ミスシス」各船「カペル」各僧「ス」師あり此  
人ハ既ニ記せる如く地理と事と以て命せしむ  
とる人よてか身体頗強健なり余も亦其遣中に  
加ふる

第一日衆行こと大抵四十里小して甚憊る路程  
尚六里ありけり所よて日没よけり土人行火把  
を燃して前行す甚疲きて遂に「カウ」といへる  
地此ハ千八百五十三年に吾儕始て此島の内地  
に遣さるし時に宿りし地なりよ着く此日尋常  
行路に比しハ二日行の路なりけり辛ふして食  
物食一の三小て直に甚冷とる被打掛て忽ち善  
眠志より疲状知り祢か  
第二日石地に足傷き是よ因て行くこと既得に  
近村に止るス各ハ「ナ」名船の墜官も痛く憊て

有けきとも余は忽ち脹起ける故亦留りて余  
を看護しとりける其他の後ハ進て遂小期せし  
地に到り二日にして願ひしよしに事行て吾所  
に歸り来りけり

此時余はといと愈ともハ尚歩きあへず余の  
人とも常ならず憊れてありけきハ各輿を令し  
土人に舁せて第五日那覇に歸りぬ  
コムモドレ再び嶋主と首府に訪ふ其儀大抵前  
度のに同じ此度も亦羹及其餘の祕看十二種ハ  
食い酒と飲む此日偶其新歳元日と値り(邪蘇曆)

法の正月二十八日なり此日琉球よて日本  
如く人々互に相往来して新正を賀す互に祝具  
を交收す尚其後八日の間人々平居より鮮衣を  
穿互に相往来田野業も休めりと凡四家毎に松  
枝と飾り戸の両側小新き植松を植つ小艇漢舟  
に至りては双様此小枝を装へりき  
前年ハ土人吾儕を恐怖ととしを今ハ其情失  
にけり微灼然と人吾儕来りて今ハ逃隠する  
者もよく街衢と行き足るに戸牖等も開きとる  
まよて最初ハ婦女子輩ハ聊其鼻形と足る事

も甚難かよしと今ハ自若にてニセサキ鋪頭小出て貨物  
の側小坐り或ハ戸内に立居る衆人我國語を認  
へてんとして勤り世界万国何處の地方小て  
之全く同状なる優愛カハユき街児の「アメリカン・アム  
リカン」と慕い呼び或ハ能吾語を知てハ「ガツ・ユ  
ー・ツ」未語汝ハいふと呼ぶ声諧謔らしく笑て  
おかし最初吾輩此小来りしより以来吾人に鮮  
衣と供ふるニ美少年甚刺カシ苦て英語を學マナひしか  
ハ遂小語理正しく英語すマナよふ小為りとり彼  
吾輩の一新語を皮即音の由ヨに疏求字もて記

載とて吾人も如此ニ余も此不由ニてその語  
收三百許并予短小成語オモツキ裁許オホを記へ得たりこの  
極終の小議のたゞ一二緊要の節目を解明カキせり  
甚用を為したるなり  
二月四日吾輩皆船ヲ歸ルコトモトレ「米利堅使  
命以奉オウたり不就カて火船を支那海チナに置カへき命以  
海軍總督より受たり是ニ因テて「ユススクエハンナ」各船  
ヲ之ヲ擇チて「ホウハタ」上を其旗章ハタと爲シたり  
而して「コムモド」上恒ニのことく妙年の工師ニ以テ率  
て是ヲ駕ルに「ホウハタ」上「ユススクエハンナ」ハ

恰ト西卵の如く何れも三千トにの舩なり此れ  
こもボウハタニ特旗章舩ヲ適當ハシき性あり此れ  
其形尖り其機械堅牢なり故なり此換命ヲ因り  
余甲比丹ミオコン止各人の下小属是ヲ因り余為  
此命殊ヲ喜志シし此君ハ諸人の凡テ敬へる  
人ヲ了讀人も思ひ出居き如く「ルホルツ」地各ヲ  
てボウハタニの指揮ヲ得しこして「ミススピ」  
我棄一人なり

二月七日我三火船發航寸三個の帆舩ハ我舟ヲ  
先ちて才一日小港ヲ發たる適ハシ港と離るる様

甲ウトサラト辺各の上海より来りぬ我舟達上  
吾人皆好き前兆なりりこき此度ハ琉球群  
嶋より東行

八日鯨群の壯觀ミミヤクヲ希觀ミミヤクり少くも三百を下りき  
る群鯨我船の四周ヲ淳遊シし時ありて我船以  
距り事五十尺を過り、一ふと潮水を高し吹上  
たて此時「キ」メンズ峡の東より此峡を七日  
ニ過り所なり



... 卷之八 ...  
... 卷之九 ...  
... 卷之十 ...  
... 卷之十一 ...  
... 卷之十二 ...  
... 卷之十三 ...  
... 卷之十四 ...  
... 卷之十五 ...  
... 卷之十六 ...  
... 卷之十七 ...  
... 卷之十八 ...  
... 卷之十九 ...  
... 卷之二十 ...  
... 卷之二十一 ...  
... 卷之二十二 ...  
... 卷之二十三 ...  
... 卷之二十四 ...  
... 卷之二十五 ...  
... 卷之二十六 ...  
... 卷之二十七 ...  
... 卷之二十八 ...  
... 卷之二十九 ...  
... 卷之三十 ...

